

2022年3月27日 受難節第4主日礼拝

メッセージ「闇から光が輝き出でよ」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章 1-12節

暖かい日が続く、桜のつぼみが少しずつ開き始めました。各地で卒園式や卒業式も行われ、華やかな衣装に身を包んだ子どもたちや若者たちの、新しい門出をお祝いするのは、とても喜ばしいことです。そんな嬉しい季節であるにもかかわらず、私の中でずっと心に引っかかるものがあるのは、やはり 1 か月前から続いているロシアのウクライナ侵攻による戦争などがあるからだと思います。

もうしばらくするとお花見に行きたいような季節になりそうですが、桜の木の下でお弁当を広げることが出来なくなって迎える 3 度目の春になりました。「with コロナ」という言葉と共に、先週からは全国で「まん延防止等重点措置」も解除されていますが、新型コロナの感染拡大「第 6 波」はまだ終わっていません。日々はまだまだ何万人という新規感染者が出ており、身近な所でも感染された方々のお話をよく耳にします。世界中でそのような状況であるにも拘らず、その中でのロシアーウクライナ戦争です。

今回の戦争がこれまでの戦争と大きく異なるのは、インターネットを利用した情報戦ということだと思います。以前は新聞やテレビやラジオなど、マスメディアと呼ばれる情報発信拠点に対して、国家が規制すれば、情報統制はできましたが、今では世界中の人たちがそれぞれ、自分で情報を発信したり、受信したりできるようになりました。そのために、国家の規制のかかったマスメディアを経由しないウクライナの人たちの生の言葉や映像を、世界中の人たちが見ることが出来て、多くの人々の心を動かしています。

ウクライナのゼレンスキー大統領も、直接の軍事力では大国ロシアに敵うはずがないということで、いくつもの国々の国会でインターネットを介した演説を行い、支援を依頼しています。とはいえ、ロシアに対する国際的な圧力が高まると、ロシアにはいくつもの核兵器がありますから、いつそれらが発射されるかもしれないという恐ろしさがあります。ここから核兵器が再び使用されて、第 3 次世界大戦にならないことを祈るばかりです。そのような中、今この日本において、自分たちにできるこ

とは何なのか。どちらかを支援することは暴力に加担することになるのではないか。イエス様の「平和を造る人々は、幸いである」(マタイ 5:9)という言葉に従うにはどうしたらよいのか、と頭を抱えてしまいます。

今回の聖書の箇所は、パウロがコリントの教会の人々に送った手紙の一節でした。とくに 8 節 9 節にある「私たちは、四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、迫害されても見捨てられず、倒されても滅びません」という言葉は有名で、また様々な行き詰まりの際に、励まされ、力づけられたと言われる方々も多いのではないのでしょうか。どうすることもできない状況に追い込まれ、途方に暮れても尚、それでも希望を失わない、などということが、どうして可能なのか。それは死を超えられたイエス・キリストの命が、自分自身の中にも共に生きているからだ、とパウロは記しています。

しかし、この言葉は、キリスト教を信じていて、イエス様と二人三脚で歩む人には、「神様からのご加護があって、無病息災、困難から免れる」ということを言っているわけではありません。パウロがこのような手紙を書いた背景には、パウロ自身がそれまでに受けたありとあらゆる苦難や迫害があり、行き詰まりがあり、途方に暮れ、希望を失ったことが何度もあったのだらうと想像します。「もうダメだ。自分はもう生きていけない」と思ったにも拘わらず、それでも尚、今も自分はこうして生きている。それは自分が自分の命を生きているのではなく、そこに神様からの命、イエス様の命が生きているから、生かされているんだということ。言い換えれば、7 節にあるように、手が滑るとすぐに割れたり欠けたりしてしまうような脆い^{もろ}「土の器」に過ぎない私たちですが、その器の中には計り知れない神の力が納められ、それによって生かされているということでしょう。そのことを自らの体験を通して、身をもって知ったパウロだったからこそ、「途方に暮れても尚、希望を失わない」と言えたのではないかと思います。

6 節には「闇から光が照り出でよ、と言われた神」という表現が出てきます。神様を表現するとき、「天におられる父なる神」や「全能の神」「万軍の主」など、様々な表現がありますが、ここでは「『闇から光が照り出でよ』『輝き出でよ』と言われた神」と表現されています。それこそ子どもたちに「神様って、どんな人だと思

う？」と尋ねてみたら、きっと「優しい人」「なんでも知ってる人」「誰にも負けない人」「ずっとずっと生きている人」など、様々な答えを教えてくれるのではないかと思います。しかし、「暗闇の中に光を創り出す人」というのは、面白い表現だと思います。これは『創世記』の冒頭にある天地創造物語の中にある言葉です。

今、世界は混乱の中にあります。どこに平和に向かう出口、暗闇の中の光があるのかが分かりません。どうしたらよいのかも分からない中、初めから見なかったことや、知らなかったことにすれば悩む必要もない、ということでしょうか。マスメディアではあまり報じられていないのは、そこに情報統制の規制や忖度^{そんたく}が働いているのではないかと勘繰^{かんぐ}ってしまいます。しかし、事態は日々に進んでいますから、「知らなかった」では済まされないことが、いつ起こってもおかしくはありません。

暴力に満ちた世界の中で、目の前の暴力から目を背けるのではなく、諦めて無抵抗のまま犠牲になるのでもなく、また別の暴力で立ち向かうのでもなく、非暴力で立ち向かうこと。それは今から 2000 年前にローマ帝国やユダヤ社会の暴力に対して、イエス・キリストがその言葉と振る舞いを通して抵抗したことそのものでした。その結果として、イエス様は殺されましたが、その命は死で終わらずに、死から引き起こされました。

パウロは言っています。「私たちはイエスの死をいつもこの身に負っています。イエスの命がこの身に現れるためです」(10)。イエス・キリストと共にあって、共に生きるとは、その死も命も共にしているということです。だからこそ「長い物には巻かれろ」ではなく、事実を見ないように目を背けるのでもなく、どこに神様の御心^{みこころ}があるのか、どこに平和を造る道があるのかを探したいと思います。

「闇から光が輝き出でよ」と言われた神は、この八方ふさがりにも見える世界に、暗闇に思える中に光を創り出されます。また私たち一人一人の心の中にも光を灯してください。だからこそ土の器に過ぎない私たちは、その与えられた命を自分のためだけに生きるのではなく、神様のために生きる者へとされていきます。この狂った世界の中で、戦争という暴力、命の傷つけ合いが一刻も早く収められるように、そして平和を創り出していくことが出来るように、私たちは今日もここから導かれていきます。